第1部

【鼎談】

日系ブラジル人の仕事・暮らし・教育

田村太郎、ウラノ・エジソン・ヨシアキ、尾崎ジョルジ

（左から）ウラノ・エジソン・ヨシアキ、尾崎ジョルジ、田村太郎

大木　それでは、第1部に入らせていただきます。「日系ブラジル人の仕事・暮らし・教育」と題して、鼎談形式で行っていただきます。ご登壇者をご紹介します。尾崎ジョルジ様。上田市で働いておられる日系ブラジルの方です。続いて、ウラノ・エジソン・ヨシアキ様。本センターのフェローであるとともに、一橋大学大学院社会学研究科フェアレイバー研究教育センターのシニア・リサーチフェローをしています。それから3人目が田村太郎様です。同じく本センターのフェローで、「多文化共生センター大阪」の代表理事をしています。

田村太郎　今日は、あまり細かな打ち合わせはしていないのですが、「日系ブラジル人住民を取り巻く課題と地域づくり」という大きなテーマの下に、「日系ブラジル人の仕事・暮らし・教育」と題して日系ブラジル人住民でもあるお2人に現状をしっかり話を聞いてみようと考えています。

前半はこれまでのことを振り返ってみようかなと考えています。1990年の出入国管理法改正以降、17年がたっていますので、これまでのことをゲストの方々に聞いてみたいと思います。後半はこれからのことです。特にこの「阿部・井上班」では教育のことをテーマにしています。これから多文化社会をどのようにつくっていったらいいのか、どんな課題があるのかということを3人で語ってみようと考えています。

最初に、この3人が何者なのかということを自己紹介していきます。先ほどの打ち合わせで、あいうえお順ということで決まりましたので、ウラノさんからお願いします。

田村太郎

ウラノ・エジソン・ヨシアキ　皆さんこんにちは。今日お忙しい中お越しいただきありがとうございます。私は東京外国語大学の多言語・多文化教育研究センターフェローのウラノ・エジソン・ヨシアキと申します。決して芸名ではありません。勘違いしないように。しかし、私は完全に名前負けしています（笑）。私はセンターのフェローであると同時に、一橋大学フェアレイバー研究教育センターというところでも研究員をしています。労働研究、労働問題が中心で、今でもそれが私の中心的なフィールドです。労働組合と連携しながら研究と実践を組み立てていくという形で進もうとしています。現在、こちらのプロジェクトとはまた別のプロジェクトで一緒に仕事をしていますけれども、APFS（Asian People's Friendship Society）という団体の山口智之さんと働いています。

田村　ありがとうございました。エジソンという名前は、ブラジルの日系人の中ではあまりない名前なんですか。

ウラノ　いや、なんぼでもあります。

田村　なんぼでもありますか、太郎ぐらいですか。

ウラノ　そうです。太郎と同じぐらいあります。

田村　分かりました。ウラノさんは、日本に来たのは何年ですか。

ウラノ　初めに来たのが92年です。そのときはまさに今、話題になっている請負業者、そういったところで事務員をして、それがきっかけでいろいろと皆さんがここで生活していく中で、日系人の問題が世の中にはあるということを認識して、その後出直しました。

田村　出直した？

ウラノ　ええ。1回ブラジルに戻って、再び日本に来てこちらの大学でやらせてもらっています。

田村　ありがとうございます。では、尾崎さん、ご紹介をお願いします。

尾崎ジョルジ　皆さん、こんにちは。私の名前は、Jorge Ozakiです。ブラジルでジョルジと言うけれども、じいちゃんがジョルジという名前を付けたら、ジョージとも呼べるから、じいちゃんはジョージ、ジョージと呼んでいます。私は日系ブラジル人2世です。上田市の住人です。出稼ぎの目的で日本に来たのは93年

です。

田村　今は自治会の役員をされているんですね。桜台自治会でしたっけ。

尾崎　はい。桜台団地の国際交流部長という役職をもらっているんですけど。

● ゴミ出し問題がきっかけ

田村　今、国際交流部長の仕事はどんなものがあるんですか。

尾崎　それを始めたときはゴミの回収の指定がちょうど変わったときで、ゴミの出し方でものすごくトラブルが出始めました。それで自治会長が誰かここの団地に住んでいる人で、日本語が分かって日本語をしゃべる人ということで。最初は私がボランティアで始めました。その後、自治会に国際交流部長というのを設けて、それから7年か8年ぐらいやっています。

田村　ずっと部長さんを。

尾崎　もう引退する時期ですね。

田村　いえいえ。先ほど打ち合わせで聞いたのですが、25世帯のブラジルの方が全員、自治会に入っていると。

尾崎　はい。全員にちゃんと自治会費をもらっています。

田村　これは結構珍しいことかなと思いましたけど。

尾崎　私はほかの自治会のことはあまり聞いてないけど、あそこは普通の感じでもらっています。

田村　「何、それ」と言う人はいない？

尾崎　何回か説明に行きましたときあります。どうして毎月払わなければいけないのかと聞かれたり。それとか消防が新しい車を買うときも、私たちがなぜお金を出さなければいけないのかと。それは上田でもう決まっているからということで話しに行って。国際交流部長になってから3年か4年間ぐらいは続けて説明しました。このごろはみんな理解してもらって、それで払っています。

田村　もう10年以上、上田におられますけど、こういう質問が一番よくないと言いながら聞くのは矛盾していますが、これからも上田に暮らし続けようという感じですか。

尾崎　そうですね。子どもがずっと保育園から小学、中学と、今は高校1年生の娘と中学3年生の長男がいますので、当分、上田で暮らして、高校卒業、大学まで考えています。

田村　子どもさんたちは、たぶんそのまま日本で勉強して働いて、ということなんでしょうね。

尾崎　読み書きは日本語だけしか知らない。うちではお母さんと私はブラジル語で話すけど、すぐ返事は日本語で返ってきます、もうコンピューターみたいに。ただ、ポルトガル語は、分かっているんだけど、まだ自分で話すことはなく本当に残念だと思います。

田村　ありがとうございました。私は、多文化共生センター大阪の代表をしています。13年前、阪神大震災のときに被災された外国の方へ情報を届けるということをやって、そのまま、逃げ遅れまして（笑）。そのとき一緒だったほかのボランティアの多くは、日常に戻っていってしまったんですけど、しつこく続けてやっています。10年ほど前までは電話相談にも直接出ていました。私はスペイン語だったのでペルーの日系の方が多かったです。ペルーの日系人も今のお話と同じように、例えば、家庭での会話で子どもが都合が悪くなると、日本語で返事をしてきて、自分は分からないので悔しい、こういうことをお母さん方からよく聞きました。10年前の話ですけれども。今のほうがたぶんお子さんが、日本で生まれたりしているので、本国から呼び寄せたりということで言えば、課題としては多くなっているかなと思います。

もう少し説明すれば、東京外語大のセンターフェローをしています。大阪外国語大学の非常勤講師もしています。今年は岐阜県美濃加茂市に、ポルトガル語の学生が隔週で実験的に地元のブラジル人NPOの放課後学習支援活動に派遣する活動を支援したりもしています。実は大阪外語大学は、07年10月に大阪大学外国語学部になってしまいました。残る国立の外国語大学は東京外国語大学だけですので、これから役割が増していくと思います。ぜひ頑張っていただいてですね。そんなことで、「阿部・井上班」でちょっとしたお手伝いはさせてもらっています。よろしくお願いします。

さて、こういうテーマで議論するときに案外、私たちはブラジルにいる日系人について知っているようで知らないことも多いのではないかと思います。ここで改めてブラジルの日系の人たちの様子を聞いてみたいと思います。ウラノさんと尾崎さんは、実はブラジルでは近所だったのです。日本に来て初めてお互いを知った？

●ブラジルの日系人について

ウラノ　そうですね。私はスザノというところで生まれたのですが、尾崎さんの場合は隣のモジ・ダス・クルーゼス。日系人が大変多い地域です。

田村　サンパウロ州ですか。

ウラノ・エジソン・ヨシアキ

ウラノ　はい。上田市で尾崎さんと知り合いました。
田村　近所で会ったかもしれないですね。
ウラノ　ええ。尾崎さんがポンカンを。
田村　尾崎さんはポンカンを栽培していたんですか。
尾崎　はい。じいちゃんが生きていたときはポンカンを6,000本ぐらい植えていました。
田村　ブラジルでいろいろな野菜が食べられるようになったのは日系人のおかげだと言う人もたくさんいますけど、それは正しいですか。
ウラノ　どうでしょうか。ポンカンはそうかもしれない。
田村　今、ブラジルで日系人はだいたい何万人ぐらいですか。
ウラノ　今、日系人は100万人か150万人ぐらいです。
田村　あちらではどうですか、暮らしぶりというか。やはりサンパウロ州の方で。
ウラノ　サンパウロ州。私はちょっとお話ししたいのですが。日系人という人たちをイメージするときに、尾崎さんと私はあまりいい見本ではないかもしれません。なぜかというと、日本人のような外見で、日本語もある程度話せるということなんですけど、皆さんご存じの通り、ブラジルというのは多民族国家です。本当にいろいろな国の人がいて生活しています。ですので、今、日本で暮らしている30万人の日系人の中には外見的にも日本人ではなくハーフだったり、あと日系人の配偶者の場合は日本人の血というものが全くない。そうなると日本語の話せない方もいますし、文化的背景も多様だと思います。

ここで私が言いたいことは、むしろその方が自然なんです。ですので、日系人が日本語を知っているのではないかという先入観みたいなものはない方がいいと思います。むしろそういう多様な日系人がいるということは、ブラジルを反映しているんです。ですので、多民族国家の日系人が日本にいていろいろな人がいる、という方が自然ですので、それがとても大事な出発点ではないかと思います。特に多言語・多文化ということをこれから推進していく場合は、資格などを考えるためにもそのポイントは大事だと思いますので、ぜひ参考にしていただきたいと思います。

田村　先ほど話した90年の入管法改正以降、日系3世とその家族が来日することができることになっています（資料p.127参照）。3世ということは、おじいちゃんかおばあちゃんが日本人であれば大丈夫ですので、おじいちゃんかおばあちゃんが1人でも日本人であれば日系人ということになるということですね。です

から、当然、3世といったらいろいろな色の髪の毛の人がいたり、多様性が日系人の世界なんだということですが、それはあまり知られてないような気がします。入管法を変えたときの議論でも、日系人だったらなじみやすいだろうと、ある種幻想的なイメージで受け入れをスタートしてしまったのかなというのがありますね。

ウラノ　そうですね。だから期待をちょっと裏切られたということになってしまうのかもしれないのですが。最初の考え方が、日系人のこちらの基準は、自然な感じで80年代半ばぐらいから始まっています。そうすると、1世とか2世の方がおられるということなのです。ただ、そこにバイアスがあったかもしれない。例えば、3世、4世、5世になってくると、どちらかというと混血の方のほうが多いのです。じゃあ、日本人に似てないからもういいや、みたいなことになると困りますので。そうではなくて、むしろ多様性というものをこれから日本社会の中で考えていくためにもいい材料ではないかと。

● 日本での暮らしぶり

田村　そうですね。ありがとうございます。尾崎さんは上田市に暮らしていて、上田市で暮らしているブラジルの方の様子はいかがでしょうか。ほかの市よりもいい面とか悪い面とか、上田市だからこういう暮らしをしているというような特徴などがあれば教えてください。

尾崎　上田が田舎と言っては悪いけど、家族付き合いを始めると、学校の困っていることや誕生日パーティーなどに呼ばれて、それから付き合いを始めると、ブラジル人は日本に来て寂しいから、その時点で家族付き合いを始めてから、それから上田はみんな優しく世話してくれるから、困った人に手を出してくれるみたいな、そんな感じがします。

田村　最近、上田では、ブラジル人の仕事が少し減ってきていると聞きますが。

尾崎　2～3カ月前に、ひとつの会社が300人ぐらいのブラジル人を減らした。

田村　携帯電話の会社？

尾崎　はい。もうひとつの会社が百何十人、人員削減で。その中には友達もいます。上田市の隣の千曲市などにいるけど、上田の友達はみんな名古屋、愛知、富山に行って、1カ月に1回ぐらいはまだ連絡は取っています。

田村　仕事ですけど、これはウラノさんの専門だと思いますが、日系ブラジルの方が大体どんなふうに仕事を探していて、問題点はどんな様子なのかをお話ししてもらっていいですか。

ウラノ　今、日本にいるブラジル人が約30万人で、多くの方が工場労働などに就いて仕事をしています。だから、90年代半ばに比べると、労働という面でよくなったかと言えば、そういうふうに私は言いたいけれども、ちょっと言い切れないという状況があると思います。特に請負業者というのは物を1個作って、その対価として、例えば大きな企業からお金をもらうという感じですけれども、今、話題になっている偽装請負が出ていたり。そういう形態を装って、だけど派遣業者であるということを多くの会社がそういう形で今まで雇ってきたわけです。

そうしたら、04年でしたか、派遣法の改正があって。前は派遣というのは専門職しかできない形態でした。例えば事務の仕事や荷役といった人たちに限りできたものでした。要するに、請負で偽装請負で働いている人たちをダシにして、正規の人をもっとちゃんと雇いましょうということで。製造業でもそういうふうにできるようになりましたが、その政策がよいかどうかはちょっと微妙なところがあると思います。

田村　請負だと、直接、工場の人が指示をすることができない。だから、Aという工場の中のBというラインをBという会社に請負に出したら、Aという会社の人はBのラインの人に指示してはだめだと。それを指示しているのを「偽装請負」と言っているけれども、派遣なら指示してもいいということで、今私が聞いているのは、偽装請負を指摘された事業者が派遣に切り替えるケースが増えてきたということです。でも派遣だと3年たったら正社員に変えないといけない。

ウラノ　そうですね。ただ、私がこれまで見てきた効果というのは、ひとつは派遣業者が請負したり、派遣業者が派遣したり、何か競争のリスクがある。先ほど尾崎さんのお話にも出てきたのですが、大きな会社がワッと採用して、雇用がその地域で決定します。上田市の場合は外国人児童向けのクラスをつくったりしていますが、そういうことがあると自治体が一生懸命そういう支援活動をしても、10人予定していたところに3人しか集まらない、そういう困難なところがあります。この問題に関して、やはり自治体の方は現場に近いわけです。いろいろな人々のニーズが直接的に育っていますので何かしますということになるけれども、その辺の声を国ももっと考えながら計画を立てていただきたいと思います。そうしないと、後回し的にものをやることになる。

● 刻々変わる雇用形態

田村　十分後回しにされていると思いますね。請負で働いていらっしゃる人は、住んでいる団地のどこそこに何時に集合して、そこにワゴンが来てみんな乗って

いくんだけど、先月までは団地から15分の工場で働いていたけど、今月からは1時間ほど行ったところの工場に変わった。それがどこの工場かも分からない。住んでいる場所と働いている場所が離れている上に、よく変わる。1時間ぐらい乗っていく、また帰ってくる。そういう話をよく聞きますが、大体そんな感じですか。あるいはちょっと極端な例でしょうか。

尾崎　一般的に、今、1時間のところで次の仕事ができるというのはまだいい方です。上田から愛知に行ったり、そういった世界になっています。

田村　これも別のところで聞いた話ですが、4月にやってきた子どもたちが3月まで、1学年ずっと通して学ぶというのは多くて6割、7割で、30％ぐらいの子どもが変わってしまうのだそうです。やはり移動が大変激しいのかなと思います。尾崎さんは、お子さんが2人いて、もうずいぶん大きくなられていますけれども、それと仕事がどんどん変わると子どもたちが落ち着かないということもあったでしょうか。尾崎さんは、ずっと上田で暮らしてきて、お子さんたちは日本語でお話しされて、ポルトガル語が分からないから日本にいるだろうというお話でした。やはりお子さんがいると長く働きたい、短い期間でたくさん働いてお金を稼ぐのではなく、できれば長く勤めたい、働きたいという考えのブラジルの人が多いと思っていいですか。

尾崎　ブラジル人の100％がそんな考えは持っていないと思います。2割か3割ぐらい、子どもを連れている家族は、ひとつの町でできればと。そんな中でその会社でも頑張って仕事をまじめに取り組まないと。

田村　すぐに辞めてしまうかもしれない人だと、やはり大事な仕事を任されないということもあったりしますか。今、尾崎さんはわりと難しい仕事というか、長く経験があるのでできる仕事をされていますか。

尾崎ジョルジ

尾崎　それは本当にありがたいと思います。今はボーイングのエンジンの部品の加工を任されています。その後、大きい縦旋盤でそんな仕事を。それを任せられた社員と一緒にやっていますけれども、やっぱり会社の社長には、何回も聞かれました。「尾崎は日本に何年いるのか」、それは何回も聞かれました。「ずっといます」という返事はしなかった。「もう永住権を取りましたから」とだけ言って、ああ、そうかと言って、それからは見方がちょっと変わってきています。

田村　短い期間の雇用がずっと連続してあるという、多くの請負の場合はそういう形態が多いと思います。雇用保険すら

入ってないケースが現状だと思います。これからは雇用期間を長くしていくべきだと思われますか。

尾崎　私が思うには、ブラジル人労働者の特徴的なことでもありますが、だいたい非正規雇用は増えてきていますし。

田村　非正規雇用自体が増えているということですか。

尾崎　そうです。本当に共通課題だと思います。ただ、移住してきた人たちの場合は、地域というのが非常に難しいと思いますし、雇用期間が長くなっていくことはないと思います。実態としては逆ではないかと思います。

田村　逆に言うと、ますます短くなる感じ。

尾崎　そうですね。2カ月とか3カ月の契約ということが多くなりました。

● 子どもの教育に及ぼす影響は？

田村　おととい大阪で別のフォーラムがあって、そこでも話が出たのですが、企業の会計の決算が、前だったら1年で決算したのが今は四半期になって。来月になれば仕事があると分かっていても今月中にクビを切ってしまうという流れにあるので、ますます請負が繁殖するのだというふうに請負会社の会長さんもおっしゃっていましたけれども、そんな傾向はあるかなと。そうすると、ますます子どもたちの教育が落ち着かないですよね。

ウラノ　そうですね。子どもの立場を守るというところから見ますと、時には何でブラジル人の親たちは子どもの教育をこんなにおろそかにするんだとか、そういうことをよく聞きます。だけど、どうしても労働のこと、生活のこと、どうやったら安定的な生活ができるのかをまず考えてしまうと思います、教育を冷たく見ているということではなくて。

田村　外国人の教育で、ブラジル人の親に聞けば帰るか帰らないか分からないと言うので、子どもに日本語を教えていいものかどうか、教育委員会として決めかねるということがよく言われています。私は子どもの教育という、本来自治体や政府が責任を持つべき問題を、ブラジル人の親の意識に転嫁してしまって本当にいいのかなと、ずっと疑問に思っているんですけど。

ウラノ　もちろん教育に対する関心というのは個人に差はあると思うので、それは努力するべきだと思います。教育熱心な人もいれば、そうでない人もいる。もうひとつそれに関連して、子どもの教育でなくて大人の日本語の教育について話したいのですが、月曜日から土曜日まで毎日12時間ぐらい働いて、土曜日に日本語を、何か習い事をしに行きなさいみたいなことはちょっと。たぶん買い物に

も行きたいだろうし、いろいろなことをしたいと思うのが普通の人間です。ですので、企業側にも給料を払いながら日本語を教えるというところまでお願いしたいです。

田村　そうですね。さて、これからのことに議論を進めていきたいと思います。子どもたちも学校を出たら今度は社会に出る。たいていは働く。あるいは働かなかったりもしますけれども、最近はブラジル人青少年の犯罪の話などが問題になっていますよね。教育以外のところでの問題点ですね。例えば年金の問題も不安があるかと思いますけれども、これから起こりそうな問題についてはいかがですか。

尾崎　ブラジルの新聞を見ていると、私が日本に出稼ぎに来て一番申し訳ないと思っているのは、ブラジル人の若い人たちの犯罪。それはブラジルの新聞にバーンと出ています。20歳より若い人たちが本当に絡んでいます。それはたぶん親に責任があります。仕事、仕事、仕事ばかり12時間毎日仕事をして、子どもの方にあまり目を向けてない。それが今一番問題になっているのがすごく悲しい。

　年金は、今、日本の政府とブラジルの政府が話し合いしているんだけど、私も期待しています。やはり日本の社会は物価がすごく高いです。日本にいる30万人のブラジル人は仕事をしています。その人たちもちゃんと払うべきだと思うのです。どうして払えないのですかね。会社が人材派遣会社に払う。どうしてその人材派遣会社と働いている人が払えないんですかね。それは分かっていることでしょう。

田村　その通りです。人材派遣や請負の値段がどんどん安くなっているんだそうです。以前は本当に儲かった。ですから国民健康保険も、年金を払っても余った。今は保険や年金を払っても赤字になるから出さないんだとおっしゃる社長さんもいます。それが本当かどうか分からないけれども、確かに最初に契約している条件が下がってきているのは事実かなと。これは日本経済全体で考えないといけない課題ではないかと思います。

尾崎　その社長さんはなぜ払わないんですか。

田村　以前よく言われていたのは、外国人も、年金や保険を払うよりも手取りが多い方がいいと言うから払わないということです。今は、払えるような余裕がないと言っています。

ウラノ　そういう人もいればそうでない人もいる。ひとつだけいいですか。先ほどの犯罪の話ですが、そういうことにならないように。要するに、日系人はわりとブラジルでは犯罪率が低いんです。ですので、どこが原因なのかというのは、

ちゃんと見ていく必要があると思います。

● 世界的な視野で考える

田村　学校に行ってない子たちが働かない場合は、家にいるということはほとんどあり得なくて、コンビニの前でブラブラしてみたり、ゲームセンターに行ったり。自然と犯罪に近付いていくということは事実だと思います。一方で、そういう子どもたちが不安なので、お父さんとお母さんと同じ工場で働き始めたりします。働いている子は多いですよ、最近はそこに労基署からの指導とか摘発が入るので、派遣会社の社長さんが逮捕されたりして。そういう判決が出ていましたけれども、じゃあ、働かなかったらどうするのかということは誰も何も言わない。そういう意味では放置してきた問題がたくさんあって、これからもドンドン顕在化していくと思います。今日は課題だけを全部出そうという話だったので、どうしたらいいのかみんなで考えましょうという終わり方をしてしまいますけれども、本当に課題はたくさんあります。

最後に、これからこういうことが必要なのではないかということを一言ずつ言ってもらって終わりにしたいと思います。

尾崎　何十年かかるか分からないけど、ブラジル人が隣に引っ越ししてきても、あっ、外人が来た、外人が越してきたよと、そういう言われ方がなくなる時代になればいいと思う。

田村　そうなればいいですね。何十年ではなくて、それを何年かに縮めればいいかなと思います。

ウラノ　これから社会保障だったり、そういうものをそれこそ10年、20年ぐらい考えていく必要があると思います。もちろん国の制度というのは、ひとつの国として成立するのが普通だと思います。日本に限らずどこでもそうだと思います。ただ、グローバル化がどんどん強くなってしまって、上田市のような小さな地域を見ても、大きな市場を求めて海外に出て行く企業がある。それに対応できない。多くの国の人が日本に来てどうしようということですので、要するに地域の性格を考えるにしても、世界的な動きを視野に入れないといけない。そういう感覚で私たちは見ていかないといけないという印象を持っています。

それは本当に今回のこちらの研究などに就いていて、それをしないと、どんなに地域だけ一生懸命考えても、実行するときにわりと難しいところがある。

田村　最初の鼎談はこれで終了します。ありがとうございました。